

しお　せ　しらべ　ばら
塩瀬下原遺跡発掘調査概報

桂川流域下水道終末処理場建設に伴う発掘調査



1999. 3

山梨県教育委員会
山梨県土木部

序

塩瀬下原遺跡の発掘調査は、山梨県大月市梁川町塩瀬地区に予定された桂川流域下水道終末処理場建設事業に伴って、1995年から現在まで4箇年度調査が実施されてまいりました。本書はそのうちの1995年度から1997年度までの3箇年度分の概要をまとめたものであります。

調査の結果、敷石住居跡9軒、配石遺構20基、石棺墓3基、石器製作跡1軒、土坑100基以上などの遺構がみつかり、それらに伴って膨大な量の土器類や石器類が検出され、このほかにも50基あまり検出された埋葬や100点以上出土した石皿なども広く注目を集め話題を呼びました。

本遺跡のある桂川流域には中谷遺跡や大月遺跡があり、これらの遺跡からは同年代の配石などの遺構や大量の遺物が発見され、ともに北都留地域の縄文時代研究の基礎となる考古資料と思われます。今後、今回の調査結果を一冊の報告書として刊行していきたいと考えておりますが、この調査概報も多くの方々の研究の一助になれば幸いです。

末筆ながら、種々のご協力を賜りました関係各位、地元の方々並びに、調査等に従事していただいた方々に厚く御礼申し上げます。

1999年3月

山梨県埋蔵文化財センター
所長 大塚 初重

例　言

目　次

- 1. 調査の経過
- 2. 遺跡と周辺の環境
- 3. 発見された遺構の概要
- 4. 出土遺物の概要
- 5. まとめにかえて

1. 本書は1995から1997年度（平成7～9年度）に実施した山梨県大月市梁川町塩瀬字下原地内に所在する塩瀬下原遺跡（しおせしたっぱらいせき）の発掘調査概報です。
2. 発掘調査は、桂川流域下水道終末処理場建設に伴って行われたもので、山梨県土木部から山梨県教育委員会が委託を受け山梨県埋蔵文化財センターが調査を実施しました。
3. 本書の執筆および編集は吉岡弘樹・深沢容子が行いました。
4. 塩瀬下原遺跡の発掘調査に関する出土品（土器・石器類）などは一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管しております。

1. 調査の経過

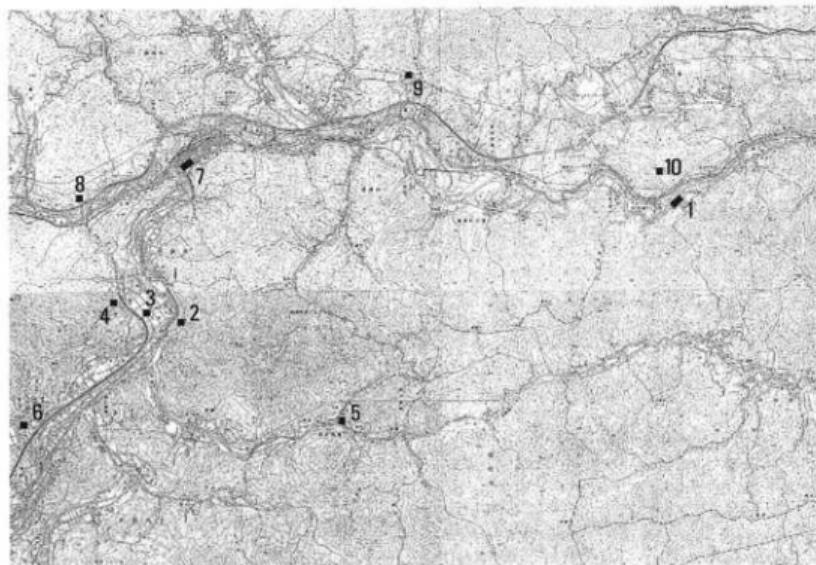
遺跡は、平成5年に全体計画が策定された桂川流域下水道終末処理場建設に伴って、試掘調査（1994年1月17日～24日・10月24日～12月28日）がなされました。これによって約20,000m²にわたる縄文時代中期から後期の遺跡が大月市梁川町塩瀬地内に展開されることが確認されました。ここから得られたデータを参考として1995年より3年間で総面積、12,800m²にもおよぶ第一次調査が開始されることとなりました。調査は買収の終了した区域（東側）から未買収地に影響を与えないように実施されました（95年度～1995年5月15日～1996年3月29日・第Ⅰ・Ⅱ地点-5.065m²、96年度～1996年5月15日～12月26日・第Ⅲ・Ⅳ地点-6.320m²、97年度～1997年4月22日～12月25日・第Ⅴ地点-4.960m²）。その結果、以下のような興味深い遺跡の概要が判明しました。

調査区の東側は、桂川に流れ込む沢や田畠の耕作によってほとんどが削平されていたため住居跡などの遺構は検出されませんでした。しかし、段丘縁辺部に縄文時代中期後半（曾利期）、やや中央部から北西方向からは縄文時代後期（堀ノ内期）の敷石住居跡が10軒ほど検出されました。また、段丘縁辺部から中央にかけて中期後半と考えられる多数の炉や埋甕が発見され注目を集めました。そのほかにも、石棺墓や石器製作址などと共に大小20基にもおよぶ配石群も調査の対象となりました。

2. 遺跡と周辺の環境

大月市は、山梨県東部第二を誇る人口約3万4千人の都市で、その広さは、東西27.1km・南北19.8km・面積280.4km²と広域で山梨県総面積の6.4%を占めています。しかし、面積は広域でありながら、その約80%は山林や原野であり残り約20%が耕作地や住宅地等に利用されているに過ぎません。大月市の東端部にあたる梁川町塩瀬字下原に塩瀬下原遺跡は所在しています。この地域は忍野八海付近を源とし、相模湾に下る桂川（相模川）によって右岸に大規模な河岸段丘が発達している様子が手に取るように分かる所として地理の教科書などにも数多く紹介されている場所です。その段丘中位（金畑・塩瀬面）は、桂川に急峻な傾斜を持ちながら流れ込む幾筋かのV字状の沢によって分断されており、その状況は、並走している国道20号から容易に観察することができます。遺跡は、この金畑・塩瀬面の東端付近、標高約237.5mに占地しており、その周囲には南側に丹沢山塊の西端、西方には約990mの標高を持つ倉岳山、北側には眼下に桂川を挟んで戦国期甲斐武田氏の狼煙台跡とされる御前山が遺跡を凝視しています。

桂川流域の主要な縄文時代の遺跡を上流部よりみてみると第1図のように段丘の中位・低位に当時の主要遺跡が点在している様子が良く分かります。



第1図 塩瀬下原遺跡と周辺の主要遺跡

No	遺跡名	時代	備考
1	塩瀬下原	縄文中～後期	配石群 集落跡
2	九鬼Ⅱ	縄文前～中期、平安	
3	中溝	縄文早～中期、平安	集落跡
4	中谷	縄文中～晚期、平安	配石 集落跡
5	尾咲原	縄文中～晚期、平安	清水天王山式期住居 石棺墓 配石群
6	牛石	縄文後期、奈良・平安	大環状配石
7	大月	縄文中～後期、奈良・平安	集落跡
8	原平	縄文早～晚期、弥生後期、平安	縄文早・中期を中心とする集落跡
9	宮谷	縄文早～後期	
10	綱之上御前山	戦国	武田氏狼煙台

3. 発見された遺構の概要

遺跡は、両端を深いV字状の沢に挟まれた河岸段丘中位のほぼ全域に広がりを見せており、縄文時代中期後半と後期の2面の文化層から、敷石住居跡10軒、炉60基、配石20基、石棺墓3基、埋甕70基、石器製作址1軒などの所在が確認されました。このほか、調査区南西角から



写真1 桂川下流から遺跡地を望む（発掘区画は97年度）

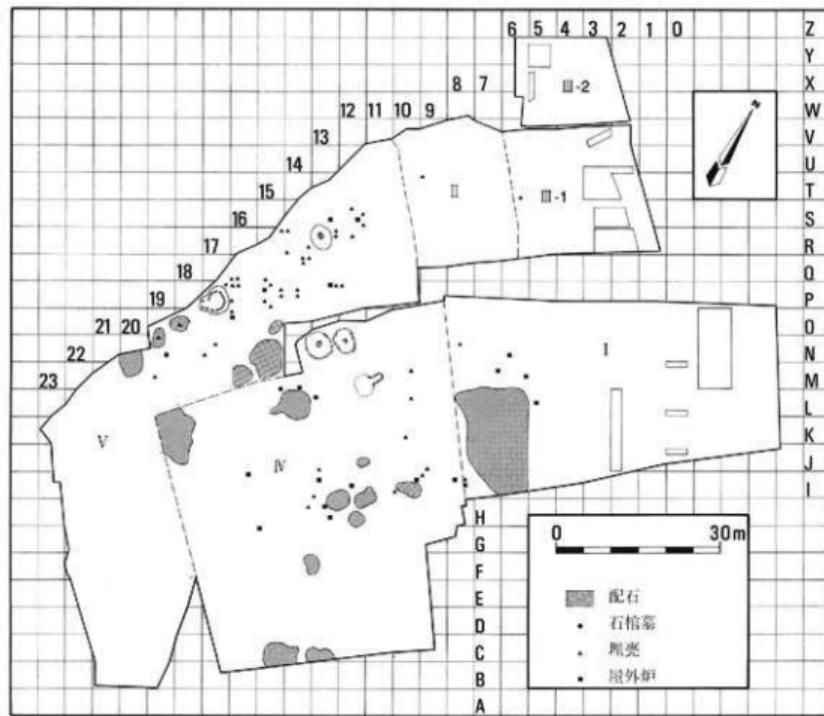
湧水と段丘上位からの小河川の流れ込みが確認され、これらの利用についても、今後の検討課題のひとつにあげて考えていかなくてはならないでしょう。また、遺物の出土量もたいへん多く多種多様の土器・石器類が発見されました。今まで大規模な遺跡がこの地域では見つかっていなかったため、塩瀬下原遺跡の発掘調査は、この空白を埋める貴重な資料となることは間違いないでしょう。

◎配石遺構

長軸約2m、短軸約1.5mの規模で扁平な人頭大の自然石を展開させている小型のものから、15×20mの範囲に面的に自然石を設置した大型のタイプまで、さまざまな形態のものが調査区全域より20基あまり検出されました。

96-5号配石【L-14区】

この配石は、96年度に調査されたもので、調査区のほぼ中央部分に位置しています。その規模は、約4×4mで形状は隅丸方形を呈し、東方（約3.5m）と南東方向（2.5m）に直線



第2図 調査区および主要遺構配置

に伸びる石列を付属させています。また、本体の南部分には直径50cm程の正円形に近い形状の石囲いされた柱穴が設けられていました。そのほか、隅丸方形状の中央部には礫が配置されない空間（約2.0×1.2m）が存在しています。この場所では、版築や柱穴の検出が想定されましたが、発見されませんでした。

配石の構築に当たって使用されている石材は、いずれも、現地で調達されたものと考えられ、大きさは1m以下の自然石で割石など加工した石材は使用しなかったようです。

さらに、特筆される点として、北側に隣接して3基の石棺墓が検出されたことがあげられ



写真2 96-5号配石検出状況

ます。形状は3基ともほぼ同一の形状で約1.0×1.8m、深度約30cmの大きさを持ちます。礫の組み合わせ方法には、角にあたる部分と辺の中点に直方体に近い自然石を立て、その間を扁平な礫の二枚重ねによる充填といった特異な特徴がみられます。なお、墓内部からは骨類、副葬品などの出土は認められませんでした。

配石と石棺墓の構築時期は、出土遺物がほとんど検出されていない点から明確に比定することは難しい状況ですが、層位的にみれば双方とも若干の時期差がみられ、関係はあまり感じられないものの縄文時代中期後半という範疇に納めることができると思われます。

97-1号配石 [M-16区]

調査区やや北寄りから97年度の調査によって検出されました。形状は、大型の自然石（約70cm）の周囲2/3ほどに10～25cmの円礫を連続させて配置しています。近くにはこの造構との関連はわかりませんが、扁平な自然石や石皿などがいくつか設置されていました。構築された時代は、周囲から出土した土器類や層位などから縄文時代後期ではないかと考えられます。

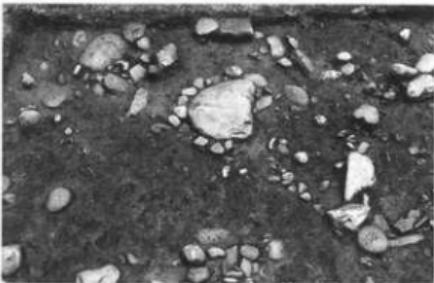


写真3 97-2号配石検出状況

◎敷石住居跡

調査区北側から西側縁辺部に10軒が検出されました。構築時期については、北側は縄文時代中期後半、西側では後期中葉と時期差がみられます。残存状況は調査地全体が土石流に見舞われ流出しているため非常に悪く、敷石面が完存しているものは97-1号住居跡1軒のみにとどまりました。

97-1号住居跡 [P-17区]

この住居跡は北側縁辺部より確認されたいわゆる柄鏡型敷石住居です。住居跡の北側後方は、約2mで河岸段丘低位に落ち込む急傾斜の崖になっています。この住居跡は壁面に自然石を巡らす柄鏡型敷石住居形態のため検出時からその形状ははっきりと判断できました。桂川と平行した西方（倉岳山方向）に入り口を持ち、居住部の主軸は、西北西-東南東に取っています。

敷石は、10～40cmの扁平な自然石を使用されており、入り口部ではほぼ全面に、居住部では、炉の周囲付近に部分的に敷き詰められていました。また、入り口部と居住部の仕切りは、

間仕切り石によって区画されています。居住部は梢円形を呈し、法量は長軸約2.8m、短軸約2.4mを測ります。主柱穴が、入り口部との接続部付近に2つが並列に、壁石の外側に多くの補助柱穴が廻る構造となっています。この構造は、本遺跡と同じ桂川流域の大月市大月遺跡や都留市中谷遺跡に近いタイプのものをみることができます。炉は、中央やや奥側にあり66×64cmと住居のサイズからみると大ぶりになります。入り口部は、140×100cmの台形状をなしていますが若干、敷石の移動が見受けられるためこれが正しい形状であったとは、言い切れません。

構築された時代は、遺物のほとんどが流出してしまっているため詳細はわかりませんが層位から中期後半(曾利式)と考えられます。

◎屋外炉

調査区域の東側を除くほとんどの地点より約25基が確認されました。設置された状況をみるとその大半が遺構最終確認面(縄文時代中期後半)である疊床中の自然石を利用してしています。さらに、住居跡内から検出される炉の多くにみられるような焼土が検出されるようなケースはほとんどなく、恒常的な使用はされなかつたようです。

96-1号屋外炉 [K-14区]

疊床中の扁平な自然石を利用して構築された石囲炉で周辺を精査確認して柱穴等が検出



写真4 床面等検出状況



写真5 挖り方検出状況



写真6 96-1号屋外炉完掘状況

されなかつたため屋外炉と認定しました。法量は、長軸82cm、短軸71cm、深さ32cmを測ります。四方に使われている自然石には、明らかに熱を受けたために生じた痕跡がみられ、その内の一石は、クラックが生じて激しく割れています。また、炉内部からは、焼土や灰などは検出されませんでした。これは、炉の使用後にそれらを掻き出していることを想定させています。さらに、ほかの屋外炉との最大の違いとして、炉の中心部に直径30cmの扁平な円盤が落とし込まれており、祭祀性を強く感じさせる屋外炉と思われます。構築された時代は、現在のところ層位などから縄文時代中期後半と考えています。

96-5号屋外炉 [K-16区]

調査区やや西寄りから検出されたもので、四方に組まれた炉石に溶岩を使用しているものです。56×52cmとほぼ正方形に近い平面形を持っています。なお、深さは、約30cmを測ります。構築の状況は、段丘礫床の自然石の一部分を除去し扁平な炉石を設置しています。96-1号屋外炉と同様に、すべての炉石に高温で熱を受けた痕跡が残されていましたが、炉内から焼土類などは検出されませんでした。なお、構築された時代は、縄文時代中期後半と考えられます。



写真8 96-5号屋外炉完掘状況

○埋甕

約60基あまりが検出されました。調査区北側周辺に60%、中央部30%、その他10%の割合で分布しています。構築時期は、主として中期後半の曾利式期であるようですが、わずかに加曾利E式や堀之内式も存在します。この中で、屋外埋甕の形態を取るものにおいては、単独で設置されているものと、複数で1単位をなすタイプに大別できます。また、単独で検出されているものの中には本来、住居内に設置されていたものが縄文時代後期以降の土石流等によって住居跡の床面より下の施設のみが残った可能性が強いようなものもあります。



写真9 95-2号埋甕検出状況

95-2号埋甕 [U-10区]

調査区北東の段丘縁辺部より確認された縄文時代中期中葉・新道期の屋外埋甕(第4図1)です。約30cmの非常に薄い耕作土直下の礫床中より検出されたもので、140×70cmほどの大型の自然石に隣接して設置されていました。法量は、直径32cm、深さ18cmを測ります。設置状況は、礫床中の礫を掘り方状に抜き取り、片側を大型の自然石にもたれ掛けさせるようにしていました。

97-28~32号埋甕 [P-16区]

調査区北側の縁辺部に5基が集中して確認されたもので、直径1.2m程の自然石の周間にあたかもそれを意識したかのように配置されています。あまり深くない位置で検出されたためか32号埋甕についてはほとんど原型をとどめておらず図示しませんでした。そのほか4点の埋甕については、比較的良好な状態で次のような状況で検出されました。(第3図)

*28号埋甕

約65cmの大型の掘り方を持ち、埋甕自身も直径約35cm、深さ20cmを測るものです。深鉢形土器の口唇部と胴部下半を欠損させた正位に配置されていました。残存部の文様構成は、頸部より上方は無文、下方は刻みを持つ隆帯が4条巡り、胴部下半には条線と刻みを持つ隆帯を垂下させています。(第4図2)

*29・30号埋甕

大型自然石の二つの埋甕が連結された状態で検出されました。双方ともに胴部下半を欠損された深鉢形土器を正位に29号が30号にやや覆い被さるように設置されていました。29号は、直径27.2cm、高さ16.4cmを測り、文様構成は、隆帯による渦巻つなぎ弧文が口縁部に施され、胴部には、LR単節純文と蛇行沈線が施されています(第4図3)。

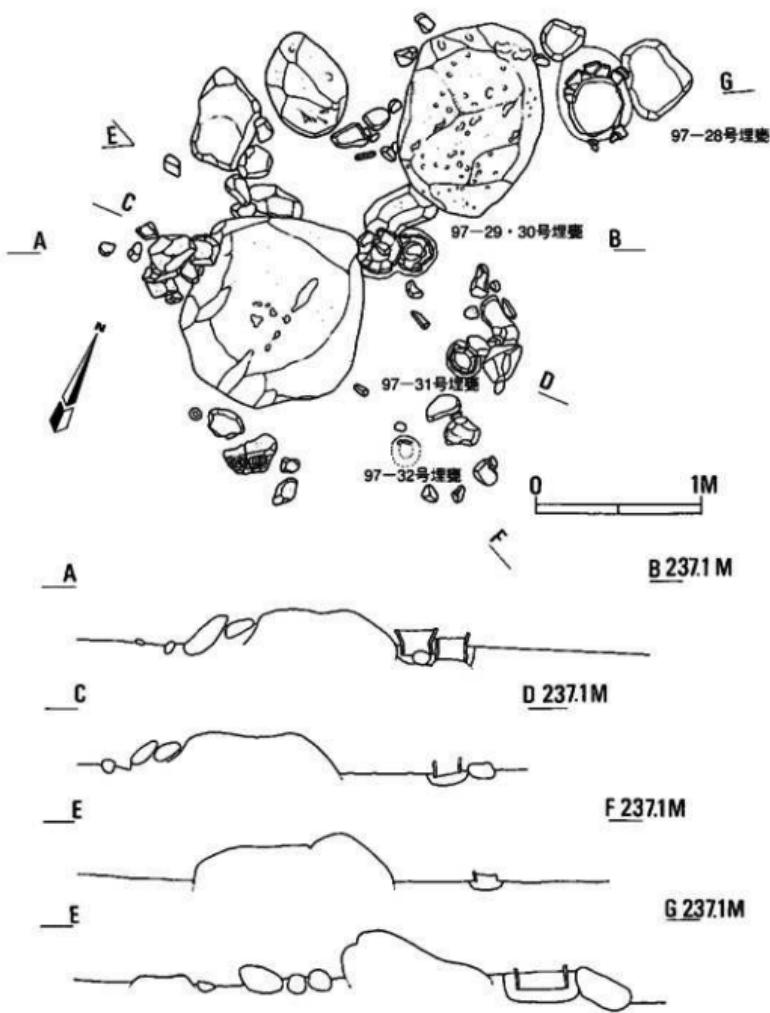
30号は、直径27.4cm、高さ21.8cmを



写真10 97-28~32号埋甕配置状況



写真11 28号埋甕検出状況



第3図 97-28~32号埋甕配置図

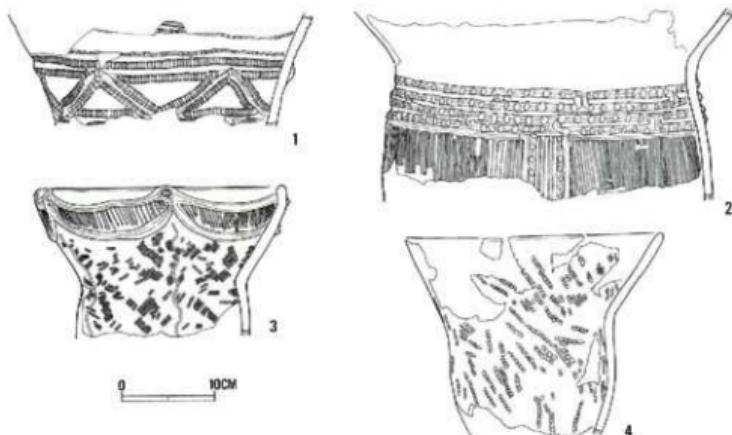
測り、全体にわずかな縄文を施しています（第4図4）。設置された時期については、双方とも縄文時代中期後半・曾利Ⅲ式期と考えられます。

*31号埋甕

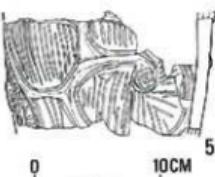
他の埋甕よりもやや小ぶりなもので、大型の自然石より、約50cm離れた地点より検出されました。



写真12 97-29・30号埋甕検出状況



この埋甕も深鉢形土器が正位で設置されました。残存状況は、胴部のみでしたのが発見された状況から口縁部付近も本来は残存していた可能性も考えられます。法量は直径16.4cm、高さ10.0cmを測ります。文様構成は、S字形渦巻文が一本の隆帯で表現されています（第4図5）。構築された時代は、縄文時代中期後半・曾利Ⅲ～Ⅳ式期と推定されます。



第4図 埋甕実測図

◎石器製作址 [O-9・P-9区]

95年度の調査で検出された。当初直径3mほどの円形に近い状態で検出されたため住居跡の疑いを持って調査に望んだところ、土層断面中より黒曜石製のチップ・フレイク類が多量に混入される層位が確認されたため石器製作址と認定されました。この遺構は、3.5×3.0m、深さ40cmの浅い皿状の不整形の形状を持ち、底面の最深部では段丘創生時の礫床面にまで達していることが判明しました。ま



写真13 石器製作址遺物出土状況

た、底面付近の各所からは、上記の黒曜石製のチップ・フレイク類に加え、石皿、打製石斧、石核などが検出されています。なお、県内では、北巨摩郡高根町で、1991年に発掘調査された、川又坂上遺跡に同形状のものをみることができます。

4. 出土遺物の概要

調査対象地のほぼ全域から膨大な量の土器・石器類などの遺物が出土しました（プラスチックコンテナ約300箱）。これらの多くは遺構に伴わないものが主で、なおかつ、現在のところ整理作業中であるため総数など詳細は判読しにくいものがあります。このため、極めて大ざかに紹介することとします。

◎土器類

土器類は、桂川流域の縄文時代中期の遺跡で多く出土する曾利式（I～IV）や、後期の堀之内式のほかわずかに加曾利B・E式などがみられます。器種は、深鉢型土器、浅鉢型土器、釣手土器、注口土器など多種におよんでいます。



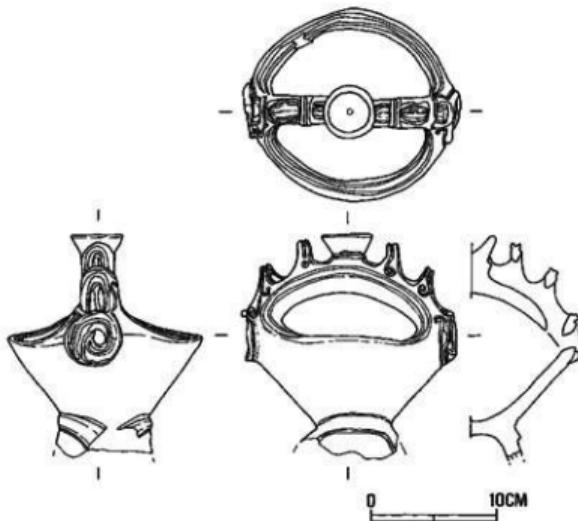
写真14 大型石棒出土状況

◎石器類

多量に出土したものとして打製石斧、石皿、磨石、凹石があげられます。特に石皿は出土状況・量の多さで多方面から注目を集めました。自然層中に単独で設置されたり、配石中の一

石を担うものとして使用されておりと様々な出土状況をみせますが他の多くの縄文時代遺跡からの出土例のように摩耗しておらず「新品」に近いものが非常に多く、大きさも40cm以上の大型から15cmほどの異形（鮑型）まで確認されています。

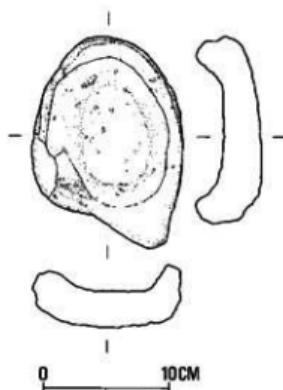
このほか、石鎌、石棒、石錘、石匙などが出土しており、石棒においては無頭式形状の長さ約90cm、直径26cm、重量約95kgの大型が検出されました（写真14）。



第5図 釣手土器実測図

5. まとめにかえて

塩瀬下原遺跡では、3年度にわたる発掘調査により、縄文時代中期後半から後期にかけての数多くの興味深い遺構や遺物が発見されました。特に、大量に発見された石皿などの石器類や祭祀性の強く感じ取れる配石、埋甕などは、桂川流域を中心とした山梨県東部での今後の研究における重要な基礎資料となることは間違いないありません。さらに、99年度に実施される本格的整理作業によって得られるであろう新しい成果に期待したいと思います。



第6図 鮑形状小型石皿実測図

調査組織

調査主体 山梨県教育委員会
 調査機関 山梨県埋蔵文化財センター
 調査担当者 吉岡弘樹 沢登正仁 大庭勝 萩原孝一
 (山梨県埋蔵文化財センター 文化財主事)
 作業員・整理員 甘利文代 天野きみ子 天野美津子 奥秋英子 小俣靖子 天野サヨ子
 甘利とよ子 甘利森枝 小笠原ヨウ子 天野サヨ子 天野駿一 秋山幸良
 天野亀一 石塚義弘 石塚敏子 小俣孝子 甘利清臣 天野宇吉
 天野カツヨ 天野春善 天野藤吉 奥山和久 小俣初枝 久嶋由美子
 上條邦子 小林悦子 久嶋スミ 小林重成 佐々木さゆり 清水末子
 鈴木忠男 佐野洋介 鈴木信子 佐々木くに子 佐々木八重子 佐藤イネ
 杉田イト江 佐藤明信 坂本ふく代 坂本君子 志村とし子 佐藤久義
 佐藤美千代 田代光男 田代久子 西室智津子 永田勤昭 平本香代
 山崎公江 米山美智子 渡辺和子 渡辺慶子 名取洋子 長田久江
 内藤由紀子 斎藤永司 長田美香 長田綾
 協力者・機関 大月市教育委員会 志村勝之 志村和善 矢羽根賢 上條弥三郎 鈴木武雄 小俣文雄 民宿やまみち

報告書概要

フリガナ	シオセシタッバラ イセキ	
書名	塩瀬下原 遺跡	
副題	桂川流域下水道終末処理場建設に伴う発掘調査概報	
シリーズ	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第161号	
著者名	吉岡弘樹 深沢容子	
発行者	山梨県教育委員会	
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター	
住所・電話	〒400-1508 山梨県東八代郡中道町下曾根923番地 ☎055-266-3016	
印刷所	株式会社印刷所	
印刷日・発行日	1999年3月19日・1999年3月31日	
塩瀬下原 遺跡	所在地 25.000分の1地名・標高 上野原・237.5m	
概要	主な時代	縄文時代中期後半～後期
	主要遺構	敷石住居跡 配石遺構 土坑
	主要遺物	土器類 石器類
	特殊遺構	石器製作址 等
特殊遺物	大型石棒 釣手土器 等	
調査機関	調査期間 1995年5月15日～1996年3月29日・1996年5月15日～12月26日・1997年4月22日～12月25日	

山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第161集

1999年3月19日 印刷

1999年3月31日 発行

しおせしたっぱら
塩瀬下原遺跡発掘調査概報

編集 山梨県埋蔵文化財センター

山梨県東八代郡中道町下曾根923番地

TEL 055-266-3016

発行 山梨県教育委員会

山梨県土木部

印刷 佛峠南堂印刷所
